

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No20(心理学)

#5 「主体的に学習に取り組む態度」と密接に関係する
自己調整学習の学術的説明を聴く
—伊藤崇達先生(九州大学准教授)にインタビュー—

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】1970年幸生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長(2020-2021年)。京都大学博士(教育学)。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

(ご紹介)



伊藤 崇達

いとう たかみち

九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授

神戸大学教育学部卒，神戸大学大学院修了，名古屋大学大学院博士課程中退。

神戸常盤短期大学，愛知教育大学，京都教育大学での勤務を経て，現在に至る。

主な著書

- ・伊藤崇達 (2009). 自己調整学習の成立過程—学習方略と動機づけの役割— 北大路書房
- ・ジマーマン, B. J.・シャンク, D. H. (編) 塚野州一・伊藤崇達 (監訳) (2014). 自己調整学習ハンドブック 北大路書房



2 自己調整のサイクルが深い学びを導く

一つ目は、「予見」と呼ばれる心の働きです。これは、学びにおいて先を見通す力のことです。学習のゴールが具体的にイメージできているかどうか、どのような内容を、どのような方法で取り組んでいこうと考えているかどうか、さらには、自分の力でできそうかどうかという強い自信があるか、興味や関心はしっかりと高まっているかどうか、こうした心の働きが大事な役割を果たします。ゴールのイメージは何よりも重要なことと考えますが、習得を目的とした学びと探究を目的とした学びではゴールのイメージは異なってくるでしょう。探究的な学習の場合、ゴールは具体的、特定のいうよりも、どちらかというところを開かれないものといえますが、動機づけを大きく支えるものであることには変わりはありません。

二つ目は、「遂行/意思コントロール」と呼ばれる心の働きです。学習に取り組む中で、しっかりと注意を向けることができているか、また、強い意思とこだわりをもちながら、ねばり強く学びに向かおうとしているか、といったことです。難しい課題に直面して、つまずきそうになったときに、自分に語りかけて、気持ちを整えることも大切にされます。認知面や感情面など、心の諸側面について、上

手に自己調整していく力が求められるでしょう。

三つ目は、「自己省察」と呼ばれる心の働きです。これは、自らの学びを自ら振り返ろうとする力のことをさしています。まずは、学びの手ごたえをしっかりと感じとっているかが大切です。学習活動を通じて、自分はとも成長した、あるいは、この部分にはまだ課題がある、といったように、真摯に自らの学びを振り返ることが求められます。思うようにできなかったとき、どうしてそのようになったのかについて分析する姿勢と、次の活動では、どのように取り組めばよいか、といった方策にまで思考を巡らすことができているかが、「自己省察」では、求められると思います。

「自分でできそう」だ「もう一度取り組んでみよう」というように、積極的な姿勢が現れると、これは、まさに自己調整による学びの進展が生起しているとみることができるといえます。「予見」「遂行/意思コントロール」「自己省察」のそれぞれのフェーズが螺旋的、循環的につながっていくのは、学びはどんどんと深まっていくのではないのでしょうか。そして、深い学びを導くにあたっては、自己調整の水準の深さに目を向けておく必要があるでしょう。漠然とした「めあて意識」で学習に臨み、なんとなく課題をこなし、そして、とりあえず学習を終え、これで十分だと振り返る。

「主体的に学習に取り組む態度」—どう評価する？

巻頭特集 「主体的な学び」 「主体的に学習に取り組む態度」—どう捉え、どう評価する？

自己調整する力を育てる授業と評価—学びに向かう力を育むために—

1 自己調整する力とは

学習において自己調整する力とは、どのようなものでしょうか。端的に表現すると、自らの意思で、自分の心や気持ちを上手に整えて、学びに向かおうとする姿勢が立ち現れている様子のことです。

多様な個性のある子どもたち一人ひとりの主体的に学ぶ姿を捉えることは、容易なことではありません。個人と環境の様々な要件に支えられて、学びの自己調整が実現しているか、子どもが主体的に学ぶ姿がどのように立ち現れるか、どの角度からどのように光をあてるかによって、大きく変わってくることに留意する必要があります。子どもの内側をみると、実に様々な心の働きが密接に関連をも

ちつつ支えあっています。あたかも風船が大きく膨らんだかと思えば、すぐに小さく萎んでしまったりするように、とても繊細なところがあるということです。

ここでは、筆者の専門である教育心理学の見地から学びの自己調整について説明してみたいと思います。とりわけ子どもたちが学びをどのように進めているかという姿に光をあてて見ていくことにします。

国語では、様々な文章を読んだり書いたりするなど、いろいろな活動がありますが、すべての学習活動には時間の流れがあります。活動の流れの全体が、適切な自己調整によって支えられることで、学びは深まっていくこととなります。特に三つのフェーズでの心の働きが、鍵を握ることとなります。



九州大学大学院准教授 伊藤崇達

伊藤崇達 (2022). 自己調整する力を育てる授業と評価—学びに向かう力を育むために— 『国語教育』 (明治図書), 871, 8-11.

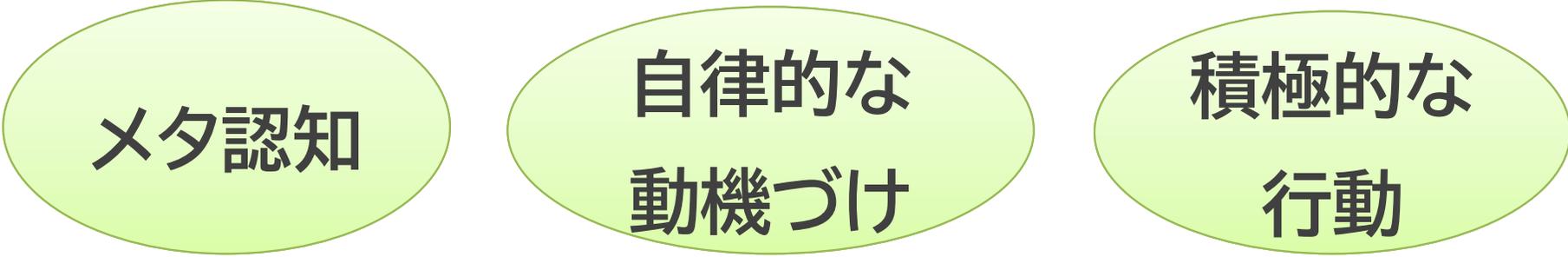
それではご覧ください

「自己調整学習」とは？

自己調整学習の3つの心理的側面

Zimmerman(1989)のよれば、「自己調整学習」について「メタ認知, 動機づけ, 行動において, 自らの学習過程に能動的に関与して進められる学習のこと」

自己調整学習は, 複雑な心理的メカニズムを内包しており, 特に, メタ認知, 自律的な動機づけ, 積極的な行動という心理的側面での調整が不可欠



メタ認知

自律的な
動機づけ

積極的な
行動

<出典>

Zimmerman, B. J. (1989). A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81, 329–339.

「自己調整学習」とは？

自己調整学習の循環的, 螺旋的なサイクル

自己調整学習は、「予見」「遂行／意思コントロール」
「自己省察」の3つの段階からなる。

そして、循環的かつ螺旋的なサイクルをなして進行する(e.g., Zimmerman & Schunk, 2001, 2011)。

→ 現場でいう「見通し」と「振り返り」

<出典>

Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (Eds.) (2001). *Self-regulated learning and academic achievement: Theoretical perspectives*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates (塚野州一(編訳)2006 自己調整学習の理論 北大路書房)

Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (Eds.) (2011). *Handbook of self-regulation of learning and performance*. New York: Routledge (塚野州一・伊藤崇達(監訳)2014 自己調整学習ハンドブック 北大路書房)

教室で「学びあい」が成立するには……

→ 主体的に学ぶとともに, 他者の主体的な学びをも支えられるかが大切

「社会的に共有された学習の調整」

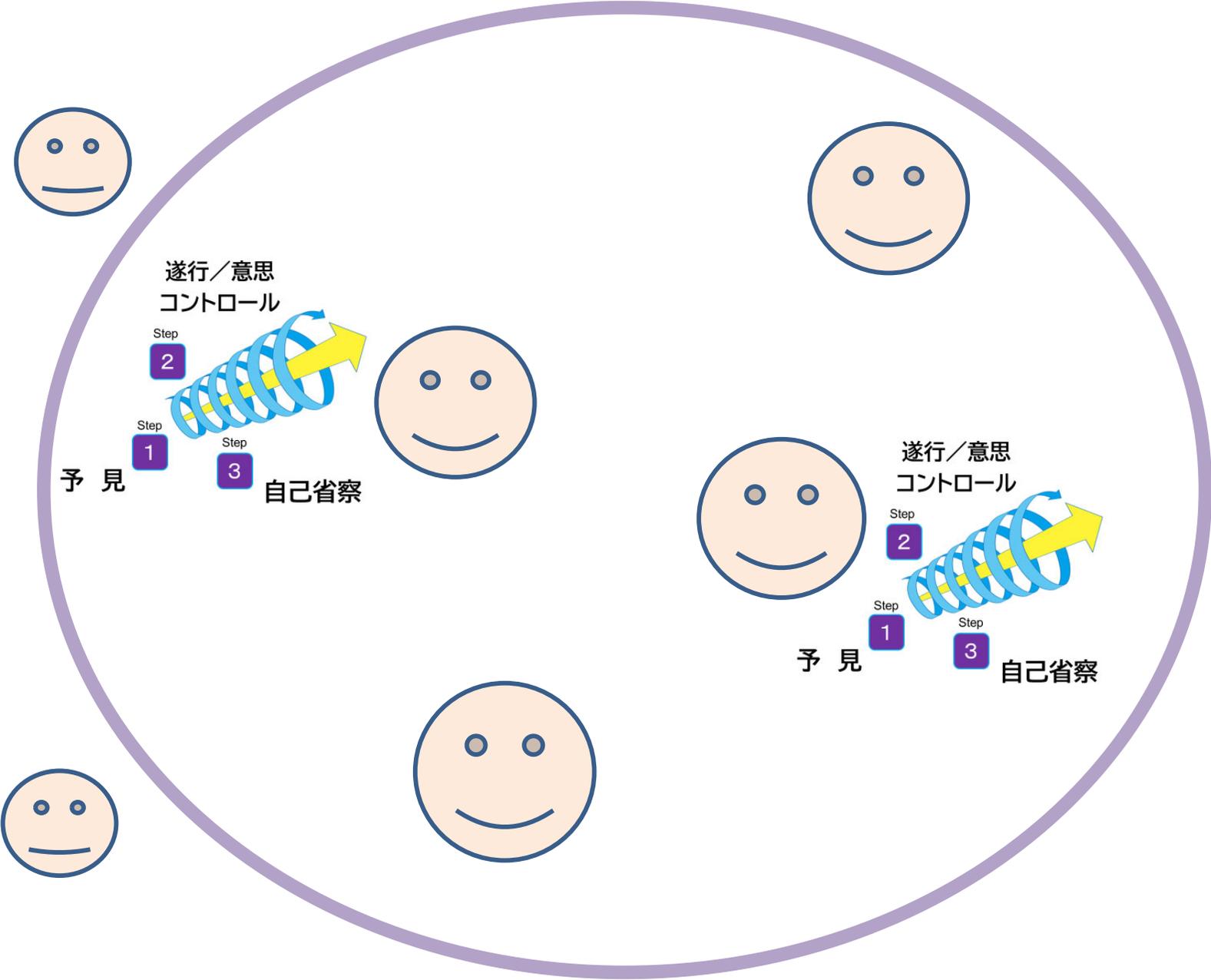
Socially Shared Regulation of Learning;
SSRL (e.g., Hadwin, Järvelä, & Miller, 2011)



「プランニング, モニタリング, 評価」といった学びを支える諸機能が, 他者と共有されつつ, 展開するプロセス

<出典> Hadwin, A. F., Järvelä, S., & Miller, M. (2011). Self-regulated, co-regulated, and socially shared regulation of learning. In B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.), *Handbook of self-regulation of learning and performance*. New York: Routledge.

共調整と社会的に共有された調整のイメージ



「共調整」とは

共調整(Co-regulation)とは, 主に二者関係においてなされる調整のプロセスのこと

お互いに調整を支えあいながら学びに向かうもので, 社会的に共有された調整へと移行するプロセス

<出典> Winne, P. H., & Hadwin, A. F. (2008). The weave of motivation and self-regulated learning. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (pp. 297-314). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.

「社会的に共有された調整」とは

社会的に共有された調整(SSRL)とは、グループのメンバーとの相互作用を通して、メタ認知的なモニタリングやコントロールなどの調整機能が、グループ全体として共有されている状態

いわば、チームとして、同じ目標に向かって動機づけられ、いかに学ぶかということも、共有される

<出典> Winne, P. H., & Hadwin, A. F. (2008). The weave of motivation and self-regulated learning. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Motivation and self-regulated learning: Theory, research, and applications* (pp. 297-314). Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.

「調整」を捉えることの難しさ

個別に進められる学習のみならず、協働学習でなされるコミュニケーションにおいても、クラスメートと共有して自己調整する機能が学びの深まりを支えている。

コミュニケーションに適切に働きかけていくことで、すべての子どもたちが自ら学びに向かおうとする共同体の実現につながっていくのでは……



<文献>

伊藤崇達(2009). 自己調整学習の成立過程—学習方略と動機づけの役割— 北大路書房

伊藤崇達(2022). 自己調整する力を育てる授業と評価—学びに向かう力を育むために— 明治図書, 871, 8-11.